

蓑虫山人の片口形土器

—本山コレクションと数寄者・好者—

山口 卓也

1. 本山コレクションの片口形土器

関西大学博物館所蔵考古学資料の本山コレクションには、神田孝平が蒐集した東北地方の縄文資料が含まれている。写真1は、そのうちの「大洞C2式片口形土器」である。高さ8cm、口径16.5cmほどで、注ぎ口がついている。内面に黒色の漆が塗布されていて（藤井1973）、出土後、茶会での花器や水指に供するため防水加工として施されたと考えられる。



写真1 片口形土器

この土器を詳細に観察したところ、片口と底部に、不自然な部分があり、形状が大きく「改変」されている可能性が考えられる。鉢の口縁部が片口の取り付け部分に段差を付けて分厚くなっている（写真2）ことや、内底漆面に木目らしきものが観察され（写真3）、破損した浅鉢形土器の口縁部破損部に、別の注ぎ口破片をはめ込み、漆の厚塗りで接着防水、さらに抜けた底部を木片で補って漆で塗込防水した、キメラのような土器であると観察できる。

2. 蓑虫山人の茶道具一切

この片口形土器は、青森を放浪した画家蓑虫山人が亀ヶ岡で発掘し、山人が描いた『陸奥全国神代石併古陶之図』や『土器図石器図絵』にもこの片口形土器の姿がある（青森県立郷土館2008）。出土時の形状のままで神田孝平に贈られたものと考えられてきたことから、本山や神田が関わった改変は考えにくい。漆の塗布は改

変と同時に考えると、改変は蓑虫山人の手による可能性が高い。

神田孝平は、明治19（1886）年夏、青森県浪岡で蓑虫と号する奇人と逢い、「この人至って古物ずき」と評し、「瓶（亀）ヶ岡掘り出しの壺から作った煙草入れ、同種の土偶の首を根付にしたもの、翡翠の大珠、蕨手鉄刀」を見せてもらっている。また、別の人から、「この老人は、茶道具一切を瓶（亀）ヶ岡土器にて取り揃えて愛玩している」と聞かされており（神田1887）、山人が、茶道を嗜んだこと、茶道具を亀ヶ岡の出土品で一式揃えていたことがわかる。

関西大学博物館の片口形土器は、蓑虫山人の「茶道具一切」の中の1点であり、山人は、破損品の浅鉢形土器に、別の片口形土器の注ぎ口と木片で補遺合成し、茶器としての花器、水指を作り上げたのではなかろうか。

挿図1は、蓑虫山人の『山人写画』（明治13～17年）の121で、山人が点茶で客人をもてなしている風景である。茶器の横に茶筴が描かれている。壁面には、山人の『土器図石器図絵』三幅と『土偶図』一幅が掛けられ、点茶席横には『陸奥全国神代石併古陶之図』らしき風炉先屏風がある。棚上には台付鉢形土器と土偶頭部が配され、床の菓子器も鉢形土器のように見える。この風景は、茶会の展観席の床と壁面を詳細に描いたものであり、山人が蒐集品を披露する数寄茶会の風景として捉えることができる。

山人は、青森の数寄者・好者を募って、考古遺物や骨董、書画などを展示紹介する「書画会」を頻繁に開催しており、この『山人写画』には、その風景が多く描かれている。その中には、煎



写真2 片口部分



写真3 浅鉢内面底



挿図1 『蓑虫山人写画』121:青森県立郷土館2008より

茶を供する場面が多く、挿図1のように抹茶を点じる事もあったようだが、会で供される茶は煎茶が主流であったらしい。

3. 本山コレクションと数寄者・好者

近代の数寄者は、純粋な茶人ではなく、多くが財・政・官界に大きな力を持つ近代ブルジョワジーの一群であり、彼らはあくまで趣味として茶を楽しみ、その巨大な財力にまかせて茶道具や古美術品を蒐集し、独特の茶風を切り開いたとされる(熊倉1980)。

数寄者間で美術品の争奪戦が起こり、値段が高騰した。かれらは蒐集を浪費と考えず、むしろ投資とみなし、さらに外国への文化財流出を防ぐ積極的な意義ある行為であるとも考えた。茶の湯から入った数寄者よりも、むしろ茶道具や美術品の蒐集趣味から入った人も少なくなかったらしく、茶の湯自体よりも古物、珍奇なものなどに執着する人々を、あえて、区別して「好者(すきもの、または、すきじゃ)」と表す場合がある。この延長線で考えると、江戸時代の木村兼葭堂や木内石亭の本草会や奇石会も、この書画会や展覧席のある茶会に似たものであった可能性が思い浮かぶ。

関西大学博物館の本山コレクションの形成には、明治、大正、昭和初期の数寄者・好者と評される人物が関わっている(山口2010)。明治4(1871)年の大学南校物産会に石器類を出品し、正倉院御物の調査に従事した柏木貨一郎は大茶人と評され、益田孝に数奇の影響を与え、自宅でエドワード・モースに古物を見せたが、文部省退官後は、政官財界の有力者に茶室を建てている(早川1998)。モースも茶の湯を稽古して、茶入などの茶器コレクションを保有して

いた。柏木と蓑虫山人が直接学術的交流をしていた神田孝平は、東京人類学会という学会、政界の重要人物という影に隠されて、茶人、数寄者としての側面ははっきりしない。

一方、明治35(1902)年、大阪を中心に書画骨董を展覧品評し、茶事を楽しむ「十八会」が結成されているが、ここでは、輪番で居宅を会場とし、抹茶と煎茶の両席を設け、展覧席に書画骨董を展示しており、青

森の書画会との類似がうかがえる。蓑虫山人の青森での活動は、北前船航路や、明治期以降の交通整備と人的交流といった解釈も必要となると思われる。

明治期後半から大正期を経て、大阪では、しだいに煎茶会は骨董の鑑賞と取引の比重を高めていき、点茶会と趣向を分けていったという。この時期に実業界に頭角を現してきた本山彦一は、茶会に姿を見せる昭和初期、大阪を代表する有力数寄者の「閑脇」と位置づけられており(斎藤2012)、本山の考古資料の蒐集が数寄として評価されていたと考えられる。同時期には、本山を取り巻く有力者である藤田平太郎や久原房之助、丸山龍平、辰馬吉右衛門らも数寄番付に名を連ねている。

蓑虫山人の展覧茶会や書画会は、公的な美術や文化財の研究機会の提供、博物館や美術館、文化財保護という近代的な制度や発想の及びきらない地域にあって、数寄と茶会が伝統的な日本の美術的、学問的価値の展示公開と保護の場として機能したと感じられる。

藤井祐介 1973「壺形土器・片口型土器・台付鉢形土器・香炉形土器」『関西大学考古学資料図鑑』

青森県立郷土館 2008『蓑虫山人と青森』

神田孝平 1887「奥羽巡回報告」『東京人類学会報告』第2巻第11号

早川正夫 1998『数寄屋ノート二十章』

熊倉功夫 1980『近代茶道史の研究』

熊倉功夫 2013「概説：近代の茶の湯」『講座 日本茶の湯全史』第3巻近代

矢ヶ崎善太郎 2013「近代数寄者の茶と数寄空間」『講座 日本茶の湯全史』第3巻近代

山口卓也 2010「本山コレクションの由来」『関西大学博物館蔵本山彦一蒐集資料目録』

関西大学博物館学芸員